

## 大和郡山市矢田町八坂神社におけるオンダの変遷

川邊絢一郎・鈴木耕太郎・鈴木萌花・平陽介

中村一輝・西野浩二・室田辰雄

### 一、はじめに

本稿は、牛頭天王信仰研究会（以下、当研究会）による奈良県大和郡山市矢田町に位置する八坂神社のオンダ（田遊び）調査の報告である。同社は、高野山真言宗の寺院である鍋蔵山東明寺の境内にあり、近世には同寺鎮守牛頭天王社と呼ばれていた。ただし、現在、同社は地域住民により管理されている。

東明寺には、中世後期から近世にかけての牛頭天王信仰に関する史料が伝わっており、その一部についてはすでに当研究会でも紹介し、またそれらを用いた考察も行なっている（鈴木耕太郎ほか〔二〇二四・二〇二五〕）。なかでも、同寺所蔵の『心経会之祭文』は、これまで論じられてこなかった心経会と牛頭天王信仰とのつながりを示す史料として注目できる。

心経会とは、般若心経の書写及び読誦を中心とした仏教法会である。除疫を主たる目的とし、疫病を司る行疫神が重視される。

なお、『心経会之祭文』は、前述したように東明寺に伝わっているものの、その奥書には「和州菩提山寺 心経会之祭文也 宝生院方持宝院 天文十七年戊申正月七日 長尊」とある。すなわち、奈良県奈良市菩提山町に位置する菩提山真言宗大本山・正暦寺の長尊なる人物が、心経会を行なうにあたって正月七日に書写した祭文だとわかる。正暦寺の祭文がなぜ東明寺に伝来したのか明らかではないものの、この祭文からは、

幣帛を掲げ、仁王経を誦誦するとともに般若心経の書写を行ない、牛頭天王や八王子などの神々を祀る正月の儀礼の様子を伺い知ることができるといえる。この祭文から今後の牛頭天王信仰の研究においては正月を含めた新春の儀礼にも注目する必要があることが明らかになった。

このように当研究会は『心経会之祭文』の考察に端を発して、牛頭天王信仰に関する新春の儀礼・行事に注視するようになった。今回着目したのが、現在も東明寺境内の八坂神社で行われている新春の予祝行事としてのオンダである。

なお、八坂神社のオンダの調査過程で、奈良県立民俗博物館が当該行事の記録映像を所蔵していることがわかった。詳細は後述するが、これらの映像は昭和の終わりに撮影されたもので、我々が調査した時点では行なわれなくなっている儀礼も見出すことができる。

本稿では現地調査の報告を行なうとともに、民俗博物館が所蔵する映像記録との比較を行ない、昭和末期から令和までのおよそ四〇年弱の間に、この行事がどんな変化をしたのか検討するものである。また、東明寺に伝わる享保年間の年中行事の記録「當山諸出仕寺役并諸堅之定掟」もあわせて参照し、近代以前の行事のあり方についても若干の考察を試みたい。

### 二、奈良県大和郡山市矢田町八坂神社のオンダ

当研究会では、令和七年（二〇二五）の八坂神社のオンダの現地調査を行なった。近年のオンダは、一月二三日の成人の日に行なわれている。まずは、令和七年の行事の様子を時系列に沿って紹介したい。

当日の午前九時三〇分、トウヤが軽トラックで境内にやってくる。トウヤは地区の人たちが集まる前に、オンダに必要な物品や神饌の準備を



図1 「オンダ」



図2 神饌



図3 神社前の門松

行なう。

神饌は、米と酒、餅、水、塩、鯛、するめ、昆布、大根、人參、里芋、みかんとともに、白い半紙に包んだ粃米を供える。松の枝に白い半紙に包んだ粃米を稲わらで結びつけたものを複数用意する。神事で利用する。これを地域の人は「オンダ」と呼ぶ（本稿では予祝行事としてのオンダと混同しないよう、この祭具については「」をつけて表記する）。

神饌はいずれもトウヤが購入するなどして準備をするが、餅はトウヤの家が餅つきをして出すことになっているという。また、神前に供えら

れている「オンダ」もトウヤの家で作る。なお、神饌の準備に際して、今年度のトウヤはそれぞれの物の配置を記したメモを用いており、そこには正月と綱掛、夏祭、新嘗（「神上」を打ち消して表記）祭の神饌の並べ方が記されている。

トウヤの任期は一年間で、秋の新嘗祭が終わった後に次の家に交代する。トウヤは、正月元旦とオンダ、七月の夏祭、秋の新嘗祭の準備を行なう。この八坂神社を祭祀しているのは、旧東明寺村の家々で現在は東明寺も含めて九軒であるが、以前は十軒あった。ただし、九軒全部の家



図4 水田を描く



図5 完成した水田



図6 撒かれた「オンダ」

が東明寺の檀家というわけではない。

八坂神社の前にある門松の準備も、トウヤの仕事である。オンマツとも呼ばれ、雌雄一対であるという。松のほか、竹、梅、南天、熊笹を使って作られている。南天について、左は白い実をつけたもの、右は赤い実をつけたものを使うという決まりがあるが、そのほかのものは左右で同じものを用いている。現在は、オンダの終了後に撤去する。

準備をしている間に東明寺の住職を含む地域の人が集まりはじめ、午前一〇時過ぎにはトウヤが神職を呼びに行くことになった。なお、この

ときは男性・女性合わせて二名が参集していた。神職は高取町下子島の小島神社から来ているが、二年前までは矢田町内にある矢田坐久志玉比古神社の神職を頼んでいた。矢田坐久志玉比古神社の神職が不在となつてから、小島神社の神職が兼務することとなり、いまに至っているという。

神職が到着するのを待つ間に社殿前に、唐鍬で水田を描く。まず、縦一メートル、横三メートルほどの角丸長方形を描き、左右の弧を二本線で切る。これは水口の表現だという。その後、全体を四つに分割する。

なお、この年は事情により、行政区の役員が描いていたが、本来トウヤの役割だという。

午前一〇時三〇分には神職が到着し、準備を終えた後、神事が行われる。修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上の後、オンダが行われる。神前に供えられた「オンダ」を神職が持つて、描かれた水田の前に進み、数回に分けて撒く。その後、玉串奉奠（代表者に合わせて参集者も拍手、一拝を行なう）撤饌、宮司一拝を経て、午前一一時頃、神事が終了する。その後、描いた水田上にある「オンダ」を参集者が拾って持ち帰り、散会となる。



図7 網（令和4年4月16日撮影）



図8 網に取り付けられていた紙垂

三、奈良県立民俗博物館所蔵の記録映像「チョウサカケとオンダ」

前述のとおり、今回調査を行なった八坂神社のオンダを撮影した映像が、奈良県立民俗博物館に所蔵されている。映像は「チョウサカケとオンダ」というタイトルがつけられたものであり、いずれも昭和六二年（一九八七）一月二日に撮影されたものである。R-1・R-2・R-3と番号が振られており、それぞれ約二二分の映像である。

撮影者は男性で時々、行事について地区の人にインタビューを試みながら映像を撮影している。もう一人、女性の調査者がいるが、撮影した映像にはほとんど姿を表さない。時々、撮影者が行事について地区の人に聞く様子も記録されている。

映像中、何度も録画を一時停止して場面が切り替わっている。その転換は急であり、構図なども十分に意識されていない。おそらく、博物館で上映するような作品の素材として撮影されたものではなく、博物館が調査の記録用に撮影したのではないかと考えられる。

ところで、映像タイトルは「チョウサカケとオンダ」だが、明らかにチョウサカケを中心とした記録となっている。このチョウサカケは、道切りの行事であるいわゆる勸請吊と考えられる。

しかし、この行事は令和四年（二〇二二）を最後に行なわれていない（当研究会の中村一輝による聞き取り調査から）。なお、令和七年の

調査時には、麓において朽ちかけた綱を確認している。この点についての詳細はまた後述したい。

先に述べたように映像は三本に分かれているが、枝番の順に行事が進行しているため、そのまま撮影した順序と考えてよい。以下に記録された内容を番号ごとに紹介する。

## (一) R-1

綱を製作する場面から記録がはじまっている。竹を横に渡したものに綱の先を掛け、稲わらの束に撚りをかける人が四名、稲わらを渡すなどする人が三名、計七名で綱を作成している。

撚りをかける人は二組に分かれ、それぞれの先端を長く伸ばしていく。撚りをかけるにあたっては、それぞれが持っているわらの束を、綱の先から見て半時計回りに渡していく。作業にあたっては、「チョウサジャ、チョウサジャ」と声をかけながら作業を行なう。途中、「チョウ、チョウ」と合いの手を入れる人もいる。

場面が切り替わると、紙垂を切る様子が記録されている。その間にも「チョウサジャ」の掛け声は聞こえており、同時進行で行なわれていたことがわかる。

再び綱づくりの場面を映す。作成し終えた綱は、先端から丸められて運ばれていく。運ぶ先は、八坂神社の社殿前である。社殿前には、左右に門松が立てられており、向かって右の門松の横に丸められた綱が置かれているのが映っている。

再び場面が転換すると、今度は長い竹を手に持ち、木に登って何かの実を取っている人と、落とされた実を樹下で拾う人のようにすが記録されている。

その後、社殿前で火を囲みながら談笑する人たちの様子が撮影されており、再び、綱づくりの場面になる。

## (二) R-2

綱づくりの映像が続く。作成した綱を丸めるときは、はじめに数本のわらの上におき、一メートルほどの長さで折り返してから二カ所で縛り、それを芯にして転がしながら巻いていく。

次の場面では、竹を渡したところに、わら縄の両端に松の枝を取りつけたものの中心に、紙垂を差しこむ様子が撮影されている。場所は、東明寺の本堂向かって右側である。紙垂を作っているのは、R-1で紙垂を作っていた男性である。

映像中に調査時の聞き書きの音声が収録されている。それによれば、約二〇メートルの綱を七本作って午前中の作業を終えたことがわかる。次の場面では、二本の綱を依って太い一本の綱を作っている。やはり横に渡した竹に先端をかけ、一人が撚りをかけ終えた部分を持ち、そのすぐ後ろを左右二人ずつに分かれて、「チョウサジャ」、「チョウサジャ」と声をかけながら、綱をまとめていく。さらに後方の綱を左右一人ずつ、一番後ろをもう一人が持ち、見守ったり助けたりする人を含めて、一〇人くらいで作業を行なっている。渡した竹に向かつて、時計回りに綱に撚りをかけていく。

作業途中に同時進行で神前での祭祀の準備が行なわれる。八坂神社の神前に供えられた神饌が記録されている。映像中で確認できる限りでは、塩や水、酒、魚、するめ、大根、餅などとともに、柿が供えられているのがわかる。また、松の枝に縄をまいた「オンダ」と榊も確認することができる。

二本の綱を縫り合せて作った太い綱は、円柱形に積み上げられていく。高さが人の股下あたりに達すると、中心に人が入って綱を巻いていく。巻き終えると、円柱形の綱を倒して、中心に竹を差しこむ。その上に松の枝を稲わらで結び、紙垂を取りつけたものを載せる場面で映像は終わる。

### (三) R-3

冒頭の映像には神職が映っており、そのまま神事のようにすが撮影されている。一段高くなっている社殿前まで進むのは、神職のほかには代表者二名である。修祓では、はじめに社殿を祓った後、「オンダ」（松の枝）、代表者二名、参集者を祓う。社殿と参集者の間には、R-2の映像で作成された綱が置かれている。祝詞奏上の場面が撮影された後、場面が切り替わり、綱の前に宮司が蹲踞しながら、切幣を三度に分けて撒く。

再び場面が切り替わると、地区の人々が綱を竹ごと担いで移動する場面になる。上に乗せられていた松の枝で作った紙垂は、別の人が持つて運ぶ。東明寺から坂道を下ったところで、軽トラックに載せて運ばれていく。

次の場面では、綱を張っている様子が撮影されている。綱を持ちながら電柱に登っていく人と、反対側の斜面で綱を持ちながら場所の見当をつける人が映っている。

電柱と逆側の綱を持った人が、急斜面に向かって歩いてくと、斜面の上にはいた人が縄を落とす。「チョウサジャ、チョウサジャ」と声をかけながら、綱を運ぶ。斜面から落とした縄を綱に結びつけ、綱を引き上げていく。同時進行で若竹を一メートルくらいに切った棒を綱の間に差し込む様子が映されている。また、その脇には、松の枝と紙垂、稲わらで

作ったものが下げられている。

その後、綱が引き上げられていく過程で、松の枝などで作られた紙垂は六本下げられており、そのうち斜面側から数えて、四本目のみに竹の棒が下げられていることがわかる。

場面が切り替わり、作業を終えた人々の様子と境内から見下ろす形で綱の様子が撮影された後、再び撮影場所が境内に戻る。境内では、唐鉞を持った男性が角丸長方形を描き、やはり左右に二本筋を入れて、水口を表現している。その後、楕円に線を三本引いて、四つの区画に分ける。映像に「これ、モチ」という声が収められている。

再び神職が現れ、神前で何らかの儀式を行なっているが、修祓や祝詞を奏上する様子は見られない。やはり、拝殿前を進むのは二名の代表者のみで、ほかの人は鉞で描いた水田の前に並んでいる。代表者が神前で拝礼するのにあわせて、境内にいる人々も手を合わせ、一礼する。代表者が順に進むのを見る限り、玉串を奉奠していると考えられる。なお、参加者はいずれも男性であり、調査者のうちのひとりを除いて、女性の存在は窺うことができない。

場面が切り替わり、神職が拝殿と描かれた水田の間に立っている。白い紙に包まれたものを手に持ち、蹲踞すると、それを少し持ち上げて軽く礼をする。その後、紙のなかから粒状のものをつかんで取り出し、額の前で一度念じてから、区切られたそれぞれの区画にまいていく。一区画につき、三度撒いている。すべての区画に撒き終えると、神職は再び社殿前に上がっていく。

場面が転換し、社殿前で代表者二名と神職が向かいあっているが、どうやら神事が終わったあとの挨拶をしているらしい。その後、代表者二名が神前に供えられていた「オンダ」を手に持ち、階段に向かう。階段

の手前で立ち止まると、「ほな、撒かせてもらいますわ」と声をかけてから、「オンダ」を人々のいる方、だいたい水田の上を目がけて撒く。

水田の回りには、地区の人たちが一〇名ほどいて、投げられた「オンダ」を拾う。すべてを投げ切ることなく、「こんくらいにしておこうか」といいふたつかみほど残しておく。「ここに置いて、明日、もしあれな人おつたらな」と話しており、どうやら今日参拝できなかった人のために残しているようである。

その後、場面が転換し、「オンダ」を拾った人にインタビューしている様子が記録されている。「これはね、米ついてまんねん。豊年やゆうてね」と述べている。その後、拝殿の神饌を片づける様子が映る。場面が切り替わり、自動車で移動しながら綱を撮影している場面で映像は終わる。

#### 四、「當山諸出仕寺役并諸堅之定掟」にみる正月儀礼

さて、前節では昭和後期のオンダとチョウサカケについて述べてきたが、それ以前はどうだったのか。これら神事・行事のあり方に迫るため、本節では一つの近世史料を取り上げたい。

冒頭で述べたように東明寺には、享保年間の同寺における年中行事を記録した史料が伝わっている（当該史料を含む史料群を調査した経緯については、前掲の鈴木耕太郎ほか「二〇二四」を参照）。

「當山諸出仕寺役并諸堅之定掟」は、享保一九年（一七二四）極月八日の奥書のある史料であり、後述するようにチョウサカケにつながる行事についても記されている。未翻刻の史料であることから、以下に全文を紹介する。なお、旧字は新字に改め、振り仮名・送り仮名は原則、原文ママで書き起こした。

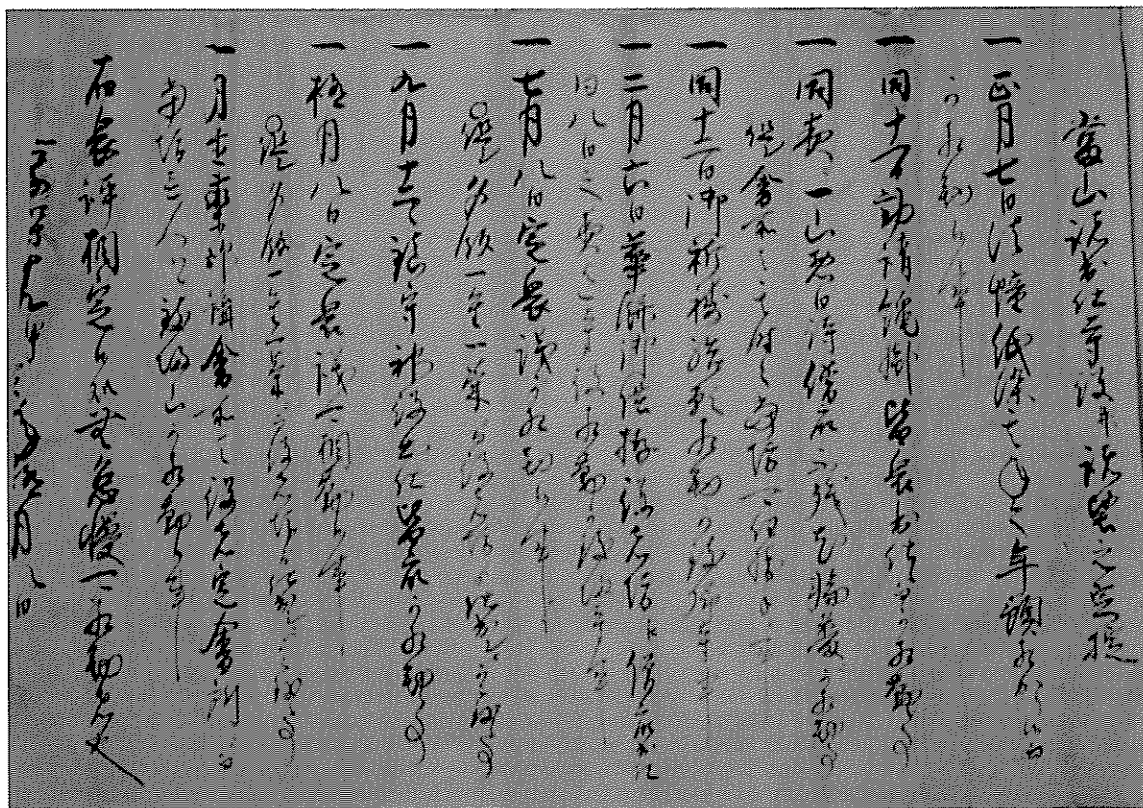


図9 「當山諸出仕寺役并諸堅之定掟」（東明寺 所蔵）

(一) 本文翻刻

- 当山諸出仕寺役并諸堅之定掟
- 一 正月七日法幢紙染其年之年預相かり候而可相勤候事
- 一 同十一日勸請繩掛皆衆出仕候而可相勤事
- 一 同夜一山惣日待僧衆不残尤輪番可相勤事  
但シ会所者其時々当坊可任勝手事
- 一 同十二日御祈禱結願相勤可致帰寺事
- 一 二月六日華餅御供持役者坊江僧衆出仕  
同八日之夜迄寺役相勤可致泊寺事
- 一 七月八日定衆議可相勤候事
- 一 〇但シ夕飯一重一菜ニテ役者坊より仕出シニ可致事
- 一 九月十二日鎮守神役出仕皆衆可相勤事
- 一 極月八日定衆議可相勤候事
- 一 〇但シ夕飯一重一菜ニテ役者坊より仕出シニ可致事
- 一 月並薬師講会所其役者定会所ニテ  
当坊一人ツ、致泊山可相勤候事
- 右衆評相定申処無怠慢可相勤者也
- 享保十九甲□年極月八日

(二) 「勸請繩掛」と「一山惣日待」

本稿において注目したいのは、正月二日に記されている「勸請繩掛」である。

勸請繩とは、一月半ばにムラ、あるいは鎮守の入口に巨大な注連縄を掛ける行事である。この縄掛けによって悪鬼や疫病といった災厄が入っ

てくることを防ぐといわれている。

本史料では「同十一日、勸請繩掛、皆衆出仕し候て、相勤むべきこと」とあり、東明寺に属する全員が参加する行事であったようだ。

これまで見てきた「チョウサカケ」も勸請繩と考えられ、本史料から享保二年には行なわれていたことがわかる。

また、勸請繩掛を行なった日の夜には「一山惣日待」が行なわれていることにも注目したい。この行事は「同夜に一山惣日待。僧衆残らず、もつとも輪番に相勤べきこと。ただし会所はその時々、当坊勝手の任すべきこと」とあり、順番に当番の僧房を決め、会所をもうけて行っていたことがわかる。続いて「同十二日、御祈禱結願相勤め帰寺致すべきこと」とあり、惣日待が前日の夜から始まり、文字通り翌日の日が昇るまで、夜通しで祈願を行なうものだったことがわかる。

五、周辺地域の事例との比較

以上、令和七年に当研究会が行なった調査で得られた情報と民俗博物館所蔵の記録映像、「当山諸出仕寺役并諸堅之定掟」から得られた情報を整理した上で、奈良県内における民俗事例を引きながら行事を解釈してみたい。

まず、トウヤが描いた水田に松苗を撒くオンダであるが、これは映像記録のインタビューに「豊年」という言葉があったように、稲が実る様子を儀礼的に再現することで、実際の豊作をもたらそうという予祝儀礼だと考えられる。

奈良県下でオンダあるいは御田植祭りと呼ばれるのは、稲作の予祝の意義をもった神事芸能で、その多くは正月から四月の間に行なわれる。オンダの際に用いられる松苗や杉苗はしまっておいて、ナワシロシメの

時にミナクチに立てることも行なわれている(保仙(一九七二))。

辻本好孝『和州祭祀記』(以下『祭祀記』)では、多くのオンダを紹介しているが、そのうち、八尾鏡作神社と多坐弥志理都比古神社、村屋坐弥富都比売神社、池坐朝霧黄幡比賣神社(田原本町)、伊射奈伎神社(天理市)、穴師坐兵主神社、大神神社、小夫天神社(桜井市)の神事では、同様のものが頒布され、「松苗」と呼ばれている。また、地区によつて違いはあるものの、田起こしから代掻き、苗代づくりから田植えに至るまでの一連の水稲に関わる農事を儀礼として再現している(辻本(一九四四))。

映像記録の時点では、神職によつて描かれた水田に播種が行なわれ、神事の終了後、靱をつけた松の枝が頒布されている。記録映像と現時点での現地調査、ともに呼称は明らかにはなっていないものの、県内のほかの事例を参考にすれば、もとは「松苗」と呼ばれていたものと考えてよいだろう。

また、今回調査を行なった八坂神社のオンダ行事においては、描かれた田に対し、神職が播種を行ない、神事の終わりに苗松が頒布されるのが以前の形であった。境内に描かれる田は、苗代を育成するための苗代田であると解してよい。

現在では、神職による播種が行なわれなくなり、神前に供えた松の枝を神事の途中で、神職が撒く形に変化している。これは苗代田に撒いた種籾が成長し、苗として成長する様子を示す儀礼だったが、現在では苗を田に撒くように見える。このようにオンダの儀礼も移り変わっている。

続いて、綱を作成して山の入り口にかけ渡す行事であるが、映像記録が撮影された時点では、約二〇メートルの綱が七本製作され、さらにそれを撚り合わせることで一本の長い綱が作られていた。その綱は、円柱

状に境内に積み上げられる。神事において、修祓が行なわれた後にこの綱は東明寺に向かう道の途中にかけられていた。

この行事は映像のタイトルとして「チョウサカケ」という呼称が用いられているが、今回行った現地調査では、その呼称を聞くことはできなかった。

なお、県内の綱掛神事において、「チョウウサ」等の掛け声をかける事例が、桜井市北山・平群町槻原でも見られる(桜井町史編纂委員会(一九五七)・奈良県教育委員会(二〇〇九))。チョウウサという言葉については、平松令三が三重県や香川県、島根県、京都府の事例を挙げながら、もともと神役につく年齢を「丁歳」といい、その歳に達した者が、神輿を昇いだり、裸体でもみ合う時に「チョーサイ」あるいは「チョーサイヤ」と発した掛け声だけが伝わっていると解釈している(平松(一九五九))。

平松の解釈は少ない事例からの推測であり、そのまま受け入れることはできないものの、「チョウウサ」という言葉が、西日本の広い範囲で神輿を昇り際などの掛け声と使われているのは確かである。この行事において、「チョウウサ」や「チョウウ」、「チョウウサジャ」などの掛け声が発せられるのは、綱を編んだり引き上げたり、複数人でタイミングをあわせ共同作業を行なう時であり、今回取り上げたチョウウサカケという名称も、神事に伴って発せられる掛け声をもとにした呼称であることは間違いないだろう。

映像で確認できたチョウウサカケでは、社殿前に円柱状に綱を巻きあげた様子が見られた。この行事を現地調査し報告している鹿谷勲によれば、円柱状に綱を巻くときに中に入る人はトウヤであり、一度倒してトウヤを出した後は、縄を撚るときに用いたオーコと呼ばれる竹を挿して神前に供えるとしている(鹿谷(二〇一三))。

前述の『祭礼記』には、チョウサカケと類似する行事も多く紹介されている。矢部、伊与戸、鍵、今里（田原本町）、長岳寺（天理市）、江包、薬師堂、谷、下高家、脇本、多武峰鹿路（桜井市）の事例が報告されている。時期はおおむね正月と五・六月に分けられるが、正月に行なっている事例では「綱が蛇がとぐろを巻いてゐる如くに丸く巻き重ね、その中央に青竹を通し、講員がそれを担いで、ワツシヨワツシヨの掛声も勇ましく神社に練り込み、拝殿に安置して祭儀に入る」（伊与戸）、「輪番制によつた其の年に当屋では沢山の薪藁を積んで待つてゐると、大勢の村人が集つて来て元気のいゝ掛声で長さ百尺、太さ三尺余の蛇型の大綱を造る」（薬師堂）などと記されている。なお、五・六月に行なう事例においても、綱やしめ縄を蛇にたとえる事例が多い（辻本 前掲）。

今回報告する事例において、蛇に見立てるといふ伝承は、現在過去とも確認できなかったものの、周辺の事例を鑑みると、もとは蛇に見立てていた可能性も考えられる。

## 六、オンドとチョウサカケの関係

ここまでオンドとチョウサカケについて、それぞれ現地調査と映像、近隣の民俗事例を参照しながら理解しようとしてきた。オンドは苗の予祝、チョウサカケは道切による禍よけだと述べてきたが、両者はどのような関係を持つているのだろうか。

ひとつの理解として、両者はもともと別系統の行事だったが、いつの頃からか一連のものとして行なわれるようになり、近年まで伝承されていたと解することはできるだろう。

この場合は、チョウサカケは少なくとも「諸堅之定掟」が記された草保年間にまで遡ることのでき、その後いずれかの段階で、寺の行事から

地域の人々が伝承する行事に移り変わっていたと理解することになる。問題はオンドの位置づけで、「諸堅之定掟」の時点で記録に残されていない以上、いずれかの段階でチョウサカケと同時に行なわれるようになったということしかわからない。

もうひとつの解釈は、「諸堅之定掟」に見える「惣日待」をオンドの前身として捉えるものである。映像記録からは、もともとオンドがチョウサカケと一連の行事として行なわれていたのは明らかである。現在、チョウサカケは行なわれなくなっているが、トウヤが持つ神饌のメモには「綱掛」の文字が見える。前述のとおり、記録映像は映像作品としてまとめることを想定した映像でないため、明確ではないものの、どうやらチョウサカケとオンドが神事全体に組みこまれる形で行なわれていたらしい。

すなわち、記録映像の段階では、①地区の人たちが綱を製作し、それが終わると②神職と代表者二名を中心に神事がはじまる。神職が修祓を行ない、綱を破え終えんと③チョウサカケが行なわれる。その後、④オンドの準備が行なわれ、⑤玉串奉奠を行なった後に、⑥神職がオンドにおいて種を撒く所作を行ない、神職による神事が続き、⑦神事終了後に、地区の代表者二名によって、松苗の頒布が行なわれるという流れである。両者を一連のものであるとするならば、苗の生育を儀礼として再現するオンドに先立って、チョウサカケによる道切が行なわれていることになる。

先に紹介した『祭礼記』における綱掛やオンドの事例を見ると、両者が一連の行事として行なわれている事例はない。ただ奈良県内の綱掛行事を見ると、農耕儀礼として実施されている事例がある。

田原本町鍵では、稲藁と表藁とで蛇体を作ったのちに「榎の木にて鍬、

鋤、鎌、備中、横槌などの野道具の小模型を造り、それを白紙にて包み、上から紅白の水引をかけ、五寸口位の青竹（長さ約五間）の先を二つ割にして挟む」という。隣接する今里でもやはり農具の模型を作る。同町矢部では、綱掛に際し「鋤、鍬、唐鋤、馬鍬かきなどに擬へた神事用具」を製作し、縁起物として参加者に頒布している。いずれも旧暦五月五日の行事だった（辻本 前掲）。

オンダとチョウサカケの関係については、現時点では、別系統のものであるとも、もともと一連のものであったとも言い切ることはできない。確かなことは、チョウサカケとオンダの行事のうち、チョウサカケについては確実に享保年間まで遡ることのできるということである。

## 七、まとめ

本稿では、矢田町に位置する八坂神社のオンダについて、令和七年の現地調査を報告するとともに、奈良県立民俗博物館が所蔵する記録映像「チョウサカケとオンダ」との比較および県内の類似する民俗事例、東明寺に伝わる「當山諸出仕寺役并諸堅之定掟」から行事の諸要素の検討を行なった。

その結果、東明寺の八坂神社のチョウサカケは少なくとも享保年間までは遡ることのできる行事であることが明らかになった。道切を行なうチョウサカケと苗の予祝儀礼であるオンダとの関係性ははっきりしないが、同じく享保年間に行なわれていた「惣日待」につながる行事である可能性がある。

そう仮定した場合には、神事のなかでチョウサカケと称される綱掛と苗代田の作成や播種などの農事を儀礼的に再現するオンダが連続して行なわれていると理解することができると考えられる。奈良県下では道切と農耕儀礼と

が結びついた事例を確認することができ、両者が一連の農耕儀礼として実施されていた可能性も十分にある。

最後に若干ではあるが、今回報告したチョウサカケやオンダ行事と牛頭天王信仰の関係性について考えてみたい。冒頭に述べたとおり、東明寺の八坂神社は、以前は鎮守牛頭天王社として祀られていたが、県内のチョウサカケやオンダの事例にも旧天王社が関係する事例が多い。

田原本町鍵の綱掛は、蛇体の形をした綱や先に紹介した農具の模型は、村社八坂神社の境内で製作されている。隣接する今里では、同じく蛇に模した綱は、村社である杵築神社で行なわれているが、最終的に綱を巻きつける古木のある場所を「八王子さん」とも称している。牛頭天王に関するテキストにおいて、八王子は天王の御子神として現れており、やはり牛頭天王と無関係ではない。

また、天理市の長岳寺の節会では、注連縄掛けが行なわれているが、その神事のなかでは牛頭天王を祀っている。桜井市江包のお綱祭は、素戔鳴神社の神事であり、スサノヲとクシナダヒメとが、夫婦の契を結ぶことを神事としたもので、江包から男綱、隣接する大西から女綱を担ぎ出して祭りが行なわれている。

同じく桜井市薬師堂の綱掛祭は、素戔鳴神社（祇園社）境内に大綱を担ぎこみ、神前にある二本の古い大樺に綱の頭をかけ渡す行事である（辻本 前掲）。

少なくとも、奈良県内の事例から考えてみれば、牛頭天王を祀る信仰と綱掛行事とは、ある程度の結びつきが見られるものと言える。

チョウサカケとオンダとの関係をはじめ、今回の報告には今後検討すべき点も多い。今回取り上げたような行事については、その来歴が明らかでない史料が残されておらず、その移り変わりの理解には困難な部分も多

い。ただし、「當山諸出仕寺役并諸堅之定掟」のような史料の掘り起こしが進めば、現前の行事に対し、より豊かな解釈の可能性が広がるのは間違いない。

また、近年の変化については、奈良県立民俗博物館が過去に記録映像を撮影しており、また記録されていた映像を同館がデジタル化し、活用可能な形で所蔵していたため、現在と過去の行事とを比較することができた。地域の情報を豊富に収集し、整理し、活用できる形で保管している博物館施設がなければ、本稿は成立しなかった。一方、私たちが行なった現地調査と東明寺に残された史料についてのこの報告は、わずかな成果ではあるものの、同館が保管する映像を理解するための情報を提供するものになるだろう。

現地調査にご協力いただいた東明寺や東明寺地区の皆様とともに、奈良県立民俗博物館とご対応いただいた学芸員の高橋史弥氏、元学芸員の西尾栄之助氏にあわせて感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 桜井町史編纂委員会 一九五七『桜井町史続』桜井市  
鈴木耕太郎・川邊絢一郎・平陽介・中村一輝・西野浩二・室田辰雄 二〇二四「鍋  
藏山東明寺藏『心経会祭文』に見る牛頭天王信仰——正月・心経会を考える」、『蓮  
華寺佛教研究所紀要』一七 四〇八〜四四五頁  
鈴木耕太郎・川邊絢一郎・平陽介・中村一輝・西野浩二・室田辰雄 二〇二五「鍋  
藏山東明寺における牛頭天王信仰 ——二本の縁起を読み解く——」、『蓮華寺佛教研  
究所紀要』一八 二六七〜二九三頁  
鹿谷勲 二〇一三『奈良民俗紀行 西大和編』京阪奈情報教育出版

辻本好孝 一九四四『和州祭礼記』天理時報社

奈良県教育委員会 二〇〇九『奈良県の祭り・行事 奈良県祭り・行事調査報告書』

奈良県教育委員会

平松令三 一九五九「チョウサ考」、『伊勢民俗』五・二 一〜三頁

保仙純剛 一九七二『日本の民俗 奈良』第一法規出版